No. 1228

くじらの町

—和歌山・太地—

盛んに愛嬌を振りまくのは我が国で初めて飼付けに成功したというごんどうくじら。ここは太平洋の黒潮に洗われる南紀の町太地。くじらの町として知られている。今でこそ、その数は少なくなったが、かってこの町にはくじらの大群が押し寄せ、捕鯨と共に栄えてきた。町の裏手の山には見張り台跡をはじめいくつかのくじらに関する記念碑がある。これらは捕鯨700年の伝統とその最盛期を忍ばせている。くじらの博物館には捕鯨やくじらの生態に関する資料が約1000点展示されている。古く江戸の昔から長い捕鯨の歴史を目のあたりに再現してくれます、今年は4月に30頭のごんどうくじらがやってきた。くじらに生きる人々が今日もまた幻の大漁を求めて海に出る。

帰らざる北方領土

—北海道・根室—

歯舞・色丹・国後・択捉、北海道根室沖につらなる北方領土日本国有の領土であるこれら北方領土の返還要求は戦後づっと叫び続けられてきた。が、日ソ両国の意見は依然対立し、いまなお北方領土の帰属をめぐる厳しい対立が続いている。
7月21日、藤田総理府総務長官は北海道根室市を訪れ、北方領土を視察した。納沙布岬からは歯舞諸島がはっきりと見え、海峡にはソ連警備艇が標泊、日ソ両国間の〝緊張〟が感じられた。北海道からわずか16キロ、沖縄本島より大きい国後島。私たちの父祖が血と汗で開拓した土地、いまだ帰らざる日本の貴重な国土である。総務長官は地元民との懇談会で『毎年10月を北方領土返還月間とし、返還運動を盛りあげていきたい』とあいさつ。ソ連が打ち出した200カイリ漁業水域の設定で、北方水域を漁場とする漁民たちは大きな打撃を受けた。これまで貝ガラ島付近で行ってきたコンブ漁も、日ソ間の合意がならず、できなかった。本年からのサケ・マス漁に対しても大きな不安が残されている。これらの漁民が安心して漁に出、自分の生れた島へ一日も早く帰れるために、国民の一人一人が北方領土の返還の声を盛りあげていかなければならない。